

南の風

June 2025 vol.306

児童労働を生み出さない
農村部からの新たな挑戦



SHAPLANEER

特集

なぜ少女は働きに出させられるのか

プロジェクト 最新情報

シャプラニールは、1972年に設立された南アジアと日本で貧困問題の解決に向けて活動する国際協力NGOです。「すべての人々が持つ豊かな可能性が開花する社会」の実現をめざし、児童労働の削減、災害に強い地域づくり、フェアトレードへの取り組み、多文化共生社会づくりの推進を行っています。

※情報は2025年4月時点

1

学校、地方行政、地域の力で 児童労働の予防と削減

児童労働

学校の児童保護方針を基に、各学校で教師、PTA、保護者、学生らそれぞれがどのようなことをしていくかの話し合いを進めている。すでに自身の学校でも方針の運用を決めたマナハリ村の校長をはじめ（写真下）、児童労働を誘発する危険性に目を向け、意識的に子どもを守っていこうというそれぞれの行動変容が期待される。



2

水害リスクに強い コミュニティづくり

防災

2024年9月の連日の大雨で、各地で大きな被害が出た。事業地でも大雨が降ったが、これまでのインフラ設置や地域住民の防災力強化が実を結び、最小限の被害に留まった。今後は約550世帯が住む河川流域で行政・住民のインフラの維持・管理力を含めた能力強化と移譲準備を進め、地域防災力高めていく。



Japan

東京都新宿区大久保
2022年5月～



多文化共生社会づくり

多文化共生

日本人と外国ルーツを持つ親子や子どもを囲み「せかいのことば・えほん会」をこれまでに3回開催。ネパール語、中国語、韓国語での読み聞かせは参加者にとって初めて聞く言語も多く、驚きの声があがった。絵本の“やさしいことば”を楽しむうちに、自然と世代や国籍を超えた交流が生まれ、親同士の何気ない世間話やぼろりと悩みをこぼせるほどの温かい時間となった。今後も体験型の企画を実施していく。



1

家事使用人として働く 少女支援

児童労働

ダッカ市内の2つの支援センターで運動会を行った。40人の少女が参加し、子どもらしい時間を過ごした。歌や踊りのコンテストも行われ、少女たちからは「初めてこんな行事に参加した」「最高!」という興奮した言葉が聞かれた。地域住民が準備や運営にかかわったことで、家事使用人として働く少女の存在や活動への理解が深まる機会にもなった。



2

ジェンダー視点による 地域防災力の強化(⇒PI0)

防災

サイクロン常襲地域で地方行政とコミュニティへ、ジェンダーに配慮した防災能力強化を行っている。洪水が起きても浸水しないようかさ上げした共同トイレ18基は地域住民が維持管理していく。ある維持管理担当の女性は、トイレで利用するための水として屋根から雨水を溜める仕組みを備えつけていた。



Bangladesh

1

ダッカ市内 2006年～

2

クルナ県コイラ郡 2024年～

フェアトレードへの取り組み

南アジアで身近にある素材や暮らしに息づく伝統を大切に物づくりを通じ、生産者の生活向上をめざす取り組み。2025年度は、Sheソーブ、ノクシカタ製品の再販を予定。また日本では、ボランティアの活躍の場を増やし、市民活動をさらに盛り上げていくため、販売や商品検品等のボランティアメニューの提示やコミュニケーションの方法を工夫・模索していく。



INDEX

- P2 プロジェクト最新情報
- P4 **特集**
なぜ少女は働きに出させられるのか
- P7 **クラフトリンク**
「モノ」に「ヒト」が宿るノクシカタ
- P8 **スタッフの想い**
ネパール事業担当 日比 愛子
多文化共生事業担当 東 香澄
- P9 **シャプラバ!**
ボランティア 田部 元太さん
シャプラ文化部
進む?! EV化
- P10 防災支援が引き出す女性たちの力
—バングラデシュ出張報告—
- P11 **シャプラ掲示板・事務局だより**

シャプラニールとは

「取り残さない、その小さな声を。」

戦争や大規模な自然災害など、
多くの人々を苦しめる事件の裏で
日々の暮らしそのものに
困難を抱えている人がいます。

そういった声なき声をすくい上げ、
一緒に感じ、考え、行動し
少しでも明日に希望が持てるよう、
ともに歩んでいくこと。

それがシャプラニールの考える
「誰も取り残さない」という精神です。

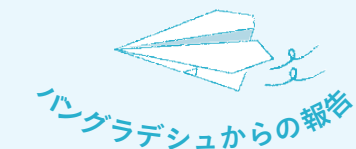
南の風 通巻306号 (季刊)

2025年6月発行

発行人 坂口和隆
発行 認定NPO法人シャプラニール
＝市民による海外協力の会
編集長 藤岡恵美子
編集 勝井裕美・高階悠輔・長瀬桃子
デザイン 柴田篤元
印刷 株式会社上毛印刷



マイメンシンの村にて女性たちに話を聞く様子



調査から 見えてきたこと

貧困と経済発展のはざままで

これらの地域の主な仕事は農業ですが、日雇い仕事は常にあるわけではなく、一日3食の食事のままならない家庭もあります。特に湿地帯であるネットロコナ県では一年の半分は水に浸かってしまします。さらに、夫の病気やケガなどで家族の収入が断たれるとより脆弱な状況に陥ります。そのような家庭の困窮を知った隣人やブローカーが「娘をタッパで働かせればよい」と親に仕事を紹介することで、少女が働きに出されてしまします。

さらに、大きな問題は「ローン返済」です。日々の生活資金や結婚持参金(※)のためにNGOからローンを借り、その返済のため別のNGOからローンを借りるという多重債務に陥っています。急速な経済発展をするバングラデシュでは、10年前はとも貧しかった村でも、家を立派にしたい、家電が欲しい、といった物質的な欲も高まり、無計画にローンを借り、その返済のために子どもを働きに出しています。

※結婚の際、女性から男性に金銭を払う風習。金銭以外の貴金屬類、電化製品などが求められる場合もある。

6月は児童労働反対月間！アクションを広めよう

2025年はSDGsのターゲット8.7の「児童労働撤廃」の目標年！シャプラニールも加盟する児童労働ネットワーク(CL-Net)では、児童労働反対の意思を示すレッドカードを掲げるキャンペーンを実施中。また、6月の特別企画として、支援センターとの中継イベントも



配信予定です。家事使用人の少女支援をより詳しく知りたい方はぜひご参加ください。

詳細は特設
ページへ！➡



シャプラニール レッドカード 検索

近

年のバングラデシュにおける経済成長と物質的豊かさという社会の変化に対し、変わらぬジェンダー差別や昔からの習慣や規範という歪みが、少女の家事使用人という児童労働を生んでいることが見えてきました。

根強いジェンダー差別

きょうだいの中で娘は学校を辞めさせられ働きに出される一方で、息子は親元で育てられることが多いです。特に農村部では、息子には将来親の面倒を見ることを期待して教育を受けさせるけれど、将来結婚して家を出ていく娘には教育は不要、という考え方がまだ根強く残っています。結果、女の子が家族のためにローン返済や貧困の責任を負わされているのです。

特集

なぜ少女は働きに出させられるのか

シャプラニールは2006年からバングラデシュ・ダッカで、「家事使用人」として働く少女への支援事業を行っています。2025年度からは農村部で活動を始めます。本特集では、少女たちが働きに出させられる背景や実態をより深く知るための事前調査について報告します。

文／バングラデシュ事務所長 内山智子

家事使用人として働く少女支援

バングラデシュ

シャプラニールは、パートナーNGOのASD (Action for Social Development) と協働で、ダッカ市内で2カ所の支援センターを運営しています。2025年3月時点で43人の少女が通っています。村から一人を送り出され住み込みで働く子が11人、村から家族でダッカのスラムに移住し数時間もしくは週に数日働く子が32人です。センターでは、基礎教育と保健衛生、歌や踊りなどの学びと、少女が「子ども」に戻れる居場所を提供しています。一人ひとりの家族状況や雇い主の情報なども把握し、少女たちの成長を見守っています。村では学校に行かせてもらえず、センターに来て初めて文字を学ぶ少女もいます。近くの学校の協力と雇用主、保護者への働きかけにより、43人のうち10人が学校に編入することができ、仕事の傍ら学校にも通っています。センターで友人と笑顔で過ごすようになった少女たちの変化を目の当たりにすると、活動の意義、成果を感じることがができます。

ところが、活動から約20年経った今も次々と新しい少女が村からやってきます。多くの少女たちは18歳前後になると親が決めた相手との結婚のため出身の村に戻れます。そして雇い主は、また新たな「家事使用人の少女」を村から連れてきます。つまり同じ境遇に置かれる少女の総数は減ることはありません。

このことから、センター運営や啓発活動に加え、家事使用人が生み出されないように農村部での活動が必要と考え、子どもを送り出す背後にある社会の根本的な課題を明確にする調査を2024年9月から12月にかけて実施しました。まず、家事使用人として働いていた、もしくは現在働いている少女9名を対象に、働きに出された当時のことについて丁寧に聞き取りを行いました。次に、住み込みで働きセンターに通う少女の多くの出身地域であるマイメンシン県とネットロコナ県にある3カ所の村で、娘を働きに出している家庭の親、地域住民、行政、学校関係者にも話を聞きました。

※支援センター：働く少女に読み書き・計算の教育や技術研修、レクリエーション等を行っている。

#Who is She?

商品をつくる人に思いを馳せる。
物づくりを通じてお互いを思いやる
関係をつくる取り組み。

1



ノシカタ刺繍
from Bangladesh



リビさん（写真右）が
いつか娘が結婚する
ときに縫ったカタ

「モノ」に「ヒト」が宿る ノシカタ

文／小川 晶子

「ノシカタ」生産者を訪ねてダッカから北に車で約6時間。2023年、初めてジャマルプールを訪れた時、色とりどりのサリーに身を包んだ女性たちと、思わず息をのむような美しい農村の風景に瞬で心を奪われました。私たちの新しいパートナー団体 Palli Crafts（ポリ・クラフト）は「工芸の村」という意味です。元アーロンのスタッフであったアズマさんとシャハナズさんが立ち上げ、国際フェアトレード機関（WFTO）の認証を取得。まだ駆け出しの小さな団体ですが、積立金制度や健康診断など少しずつ生産者の福利厚生を充実を図っています。

生産者の一人、リビ・アクタールさんは以前、ダッカで縫製工場に勤めていましたが、子どもが産まれ1日14時間の長時間労働ができなくなり、夫の故郷に家族で移ってきたとのこと。“農村部で家族と暮らしながら家事の合間に仕事ができること”はこれからの手しごとの役割の一つなのかもしれません。

村の女性たちが、お母さんの着ていた思い出が詰まったサリーで縫ったカタ（刺し子の布）を見せてくれました。どの家庭でもとても大切にされています。一針ひと針刺していく、そこには大切な人への想いが宿っていると感じます。私たちが突き進む機械化の時代に、「手間をかけること」「人間らしさ」といった価値を表しているのではないのでしょうか。

新商品入荷！

ノシカタの商品は、今後ラインナップを充実
させていただきます。詳細はオンライン
ショップ等をご覧ください。

<https://craftlink.shop/>



上) 村では竹や木を使った家が多い。トタンを使う家も増えている
左) ダッカには高層ビルが立ち並び、車で大渋滞が起きている
右) インタビューの様子



私はネットコロナ県の出身で、父と母、3姉妹5兄弟の10人家族です。父は背骨が悪く仕事ができず、母も身体が弱かったため、家族はいつもお腹が空いたまま眠らなければならませんでした。私は5歳の時、叔母に連れられてダッカにきました。「ダッカに行けば1日3食食べられ良い生活ができる」という大きな期待とともに。しかし実際は、毎日使用人として働かされ、夜は冷たい居間の床で眠らされました。16歳の時、雇用主がセクターに連れていってくれ、私は初めて文字の読み書きと計算を学びました。なにより、センターではかけがえのない友人ができました。今は雇用主の家を出て、パートタイムで使用人の仕事をしながら、友人と一緒に部屋を借りて暮らしています。

Message



近年のバングラデシュは急速な経済成長と社会変化の中で、取りこぼされてしまう問題や新たな歪みが生じています。すべての子どもたちが「子どもらしく」、笑顔で暮らせる社会をめざして、これからも取り組みを進めていきます。

この活動をもっと知りたい方へ

オビニオン誌「もうひとつの南の風」
vol.27をご覧ください



児童労働根絶のためには、すでに働いている子どもに対する活動だけではなく、新たな児童労働を生み出さないために、教育やジェンダー格差といった基本的な社会課題への理解、意識啓発なども同時に必要です。2025年度は、セクター運営に加えて、農村部での親へ子どもへの権利や児童労働の害を伝えること、学校関係者と連携して中退率を減らすこと、地方行政との連携により必要な社会福祉サービスにつなげるといった取り組みを通じて、村から児童労働が生み出されなくなるよう働きかけていきます。

調査を終えて、今後の活動



特集
なぜ少女は働きに出させられるのか

ダッカでの生活への期待と現実

家事使用人として働いていた女性（23歳）のお話